鶴翔

題字は初代会長 故田倉八郎氏筆

第14号

発行所　東京鶴翔同窓会
東京都千代田区内神田2-16-9（〒101）
荘内銀行
東京支店内
TEL03-256-8911

故郷と手を結ぶ

印刷所
株式会社　一芳タイプ
代表取締役　長谷川勝一（59回）
新宿区筑土八幡町31番地
第一芳栄ビル
TEL 03－235－2691㈹

ごあいさつ

鶴翔同窓会会長　酒井忠明

東京鶴翔同窓会の各位、益々御健勝にて御活躍のことと存じます。今年の冬は東京も二十数回の雪に見舞れたそうですが、故郷庄内も長い厳しい冬でした。零下一〇度、猛吹雪が十日もつづき交通はマヒ、おまけに水不足で水道は出なくなる、心細いかぎりでした。それにこんなに春の遅い年も覚えがありません。此の稿を書いている四月中旬、母校のグランドや校舎の中庭などまだ雪が残っており、公園の桜の蕾もまだ固く当分咲きそうもありません。

さて、五十六年から着工した母校の改築も此の春体育館の完成によってすべて完了。校舎が美しく至れり尽せりと感服致しましたのに、此の春出来た体育館は豪壮といいましょうか、素晴しいものです。母校は九十六年で面目を一新しました。

一方、此の春三月三日、五十七年の歴史をもつ定時制課程を閉じました。最後の卒業生は二名。働きながら学ぶなどしなくてもよくなった、世の中がそれだけ豊かになったということは喜ぶべきことかもしれませんが、しかし五十七年の歴史の閉じることは一抹の淋しさがあります。定時制卒業諸氏の感慨やいかにと思いやられます。閉じるに当り卒業生有志各位の御賛同により、三月三日記念式並に懇談会を開催致しましたが誠に盛会且つ意義深い記念式、懇談会でした。また立派な記念誌も発行されましたし、校門入ってすぐ左手には「星窓」の二字に定時制の歴史の一文を刻した記念碑も建立されました。懇談会の時、働きながら学んだ――時間が惜しく真剣に学んだ――気力と努力だったという話に感動いたしました。

豪壮な体育館、その奥の美しい本校舎をながめ、閉じる記念碑の前に立つ時大きな時代の流れを感じます。現在の学生諸君、このめぐまれた世にいかに学びいかにたくましく生きるか、大いに奮起してもらいたいと思います。

今年は六月二十三日に東京鶴翔同窓会が催されるよし、楽しみにしております。この会も年々盛会になりますことは御同慶の至り、今年はどんな企画でしょうか……。

母校もあと四年で百年を迎えます。同窓会としても今年あたりからいかに百年を迎えるか準備をしておかねばならぬかと思っております。その節には東京はじめ各支部の御協賛を願いたく、各支部益々の御発展を祈る次第。何れ二十三日皆さんに御目にかかります。

▲改築なった母校・佐藤善一校長提供

第14回東京鶴翔同窓会のご案内

“東京に庄内の火を”

今年はこれをテーマに企画し、会を盛り上げていきたいと思います。同窓生一同、大いに御参集いただき、若き青春時代を語り、庄内の風物を語り、現代を語り、交歓を尽し、健康を祝い合いたいと思います。

日時　昭和五十九年**六月二十三日（土）**
午後〇時半受付、一時半開会～四時閉会

会場　**学士会館**＝神田錦町三―二八　☎二九二―五九三一
（地下鉄＝神保町、竹橋、お茶の水、新お茶の水。国電＝お茶の水、水道橋…地図参照）

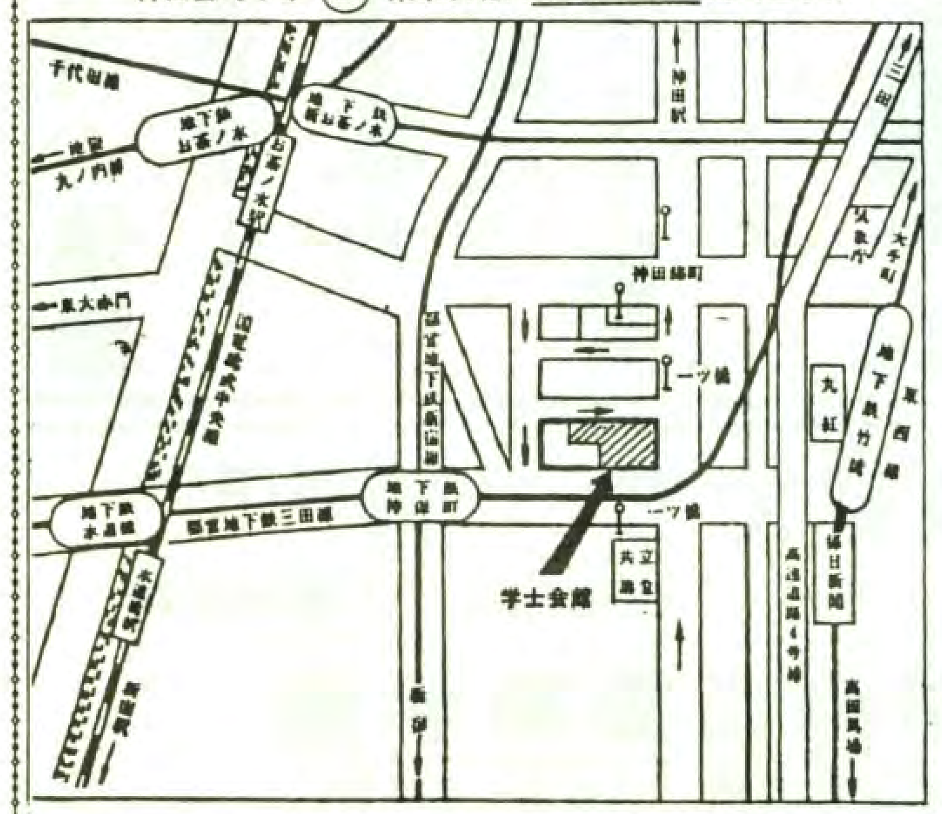
会費　五、〇〇〇円　年度会費　一、〇〇〇円以上

特別企画
●学校授業風景、クラブ活動、鶴岡風物のビデオ上映
●演芸＝郷土出身のプロ歌手、舞踊家による総勢二〇名による歌と踊り。民謡 三浦京子氏、歌曲 三澤潔子氏、中国舞踊 渡部曙氏、高柳美根氏、民謡 伊藤かづ子氏など出演。
●同窓の著名人、寄贈者の色紙交換。
同窓会長 酒井忠明氏、画家 斎藤求氏、山本甚作氏、元横綱柏戸剛氏、現役横綱の各氏、黒柳徹子氏ほかの各氏の色紙と松岡屋特製庄内やきふを合わせて、くじ引きによりお分けします。
●庄内物産店を開きます。そのほか御寄贈の地酒、当日の荘内日報、温海の焼物のお土産も用意いたしております。

出欠返信　**六月十日必着**のこと。
※今年は「6」の回卒が幹事年度（来年は「7」）です。ふるってご参加ください。

ご案内

●地下鉄　神保町（都営三田線／都営新宿線）（徒歩1分）
竹橋　東西線（徒歩6分）
御茶ノ水　丸の内線（徒歩15分）
新御茶ノ水　千代田線（徒歩15分）
●国電　御茶ノ水（徒歩15分）
水道橋　都営地下鉄三田線　水道橋駅のりかえ
●バス　（神保町下車）
一ツ橋下車　(水59)　一ツ橋　水道橋経由　巣鴨駅行
神田錦町下車　(東43)　東京駅北口　御茶ノ水経由　荒川土手行



学士会館（本館）
東京都千代田区神田錦町3－28　電話(03)292－5931(代表)

東京鶴翔会を発展させよう

東京鶴翔会々長　梅津正吉（34回）

東京で同窓会を開催するようになってから、早くも十数年を経過しました。昭和四十六年十月八日、とにかく第一回の会合を丸の内の永楽クラブのホールで開きましたが、当日の出席者は二百三十名でした。

この種の会合は、とかく年配者の集会になり勝なものですが、出席者の年齢を見ますと、三十代が最も多く、それに四十代、五十代と続く有様で、やはり郷里を離れて活躍している若い人達の関心が強いことを知りました。そしてこの傾向は、回を重ねる度に顕著となり、特に当番幹事を毎年変えて、卒業回数順にお願いする事になってからは、毎年新しい企画が盛りこまれて、一層楽しいものに発展して来た様に思います。

この会に対しては毎回本部からは祝金を賜り、役員各位の遠路御出席と、御激励をいただいて居りますが、在京の有志の方々や、更に最近は郷里の方々からまで御賛助を戴くようになりました事は、誠に感激の至りであり、在京同窓生として益々自重奮起せざるを得ない事と思います。

本会の発会から常に御高配を賜りました先輩各位と、数々の御苦労をおかけしました各年度の幹事諸兄に、心から感謝して、後続年度の皆様にご協力をお願いする次第です。

最後に既に故人となられました先輩各位のご冥福を祈り、同窓諸兄のご健康とご発展を祈ります。

母校の近況―新校舎竣工なる

校長　佐藤善一

東京鶴翔同窓会の皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

結成以来十余年、年々隆盛を重ね、昨年の如松同窓会との合同総会にお招きをいただいた折の、あの盛会さ、溢れ出るようなエネルギーに本当に驚嘆し感激しました。卒業生の皆様が日頃母校にお寄せ下さる思いの深さを改めて痛感しました。

本年の総会も昨年にまして一層盛大な会でありますよう、心からお祈りいたします。

かねてご案内のように、昭和五十八年度をもって夜間定時制はその課程を閉じることになり、その式典等が去る三月四日に挙行されました。皆様の絶大なご援助、ご協力により、記念誌・記念碑に五十七年間の輝やかしい歴史を刻み伝えることができましたことは、本当に有難く、厚く御礼申し上げます。

母校の現況を簡単に申し述べたいと思います。

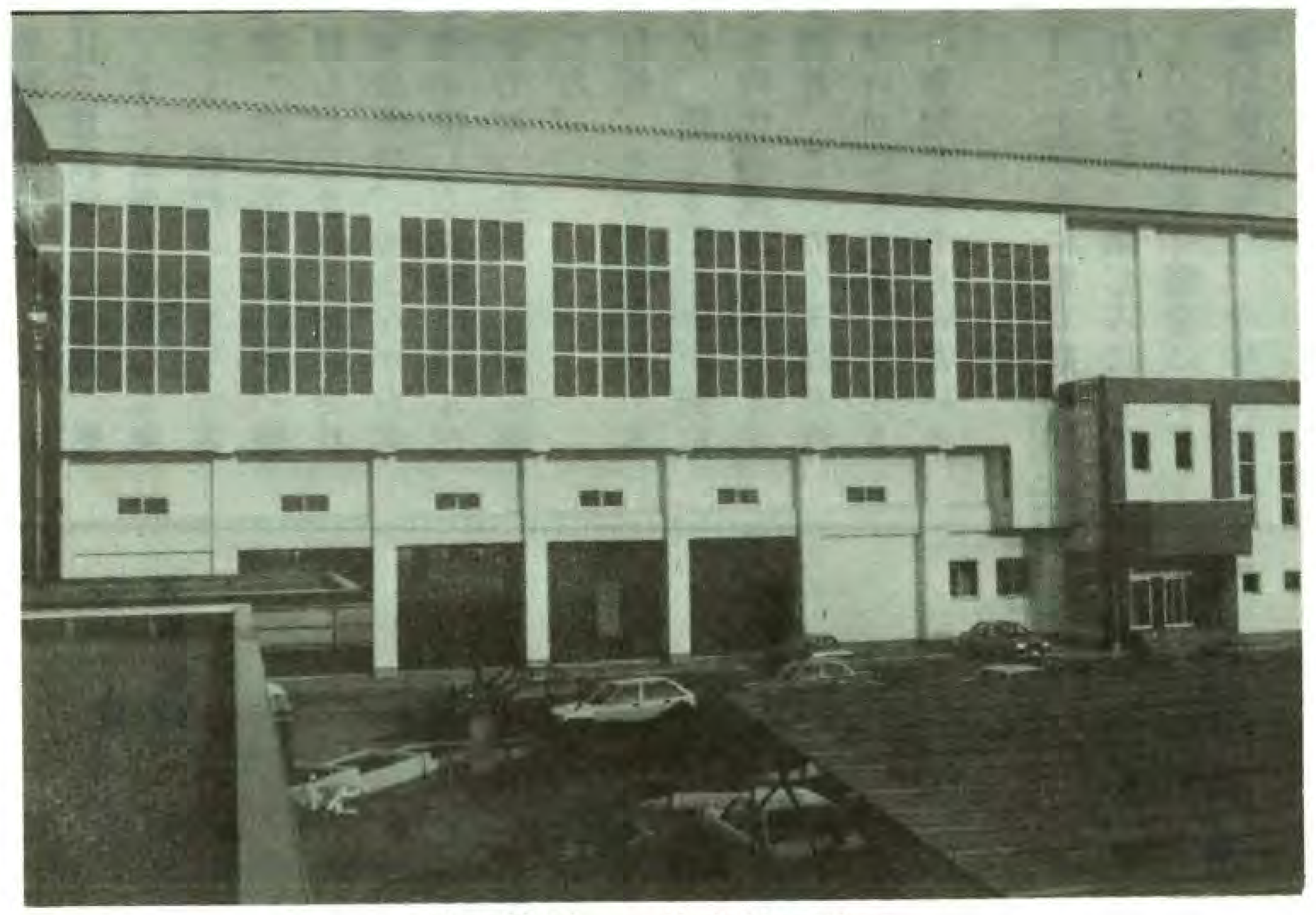
三年続いた校舎改築工事も、三月に体育館が完成し、校舎そのものの改築はすべて終りました。すっかり面目一新し古い校舎の面影が消え去り、卒業生の皆様には何か申訳なくさえ思います。新校舎の一部の写真を添えましたが、ここで校舎の全貌を述べることはできませんので、どうか帰郷の折には是非母校にお寄りいただきたくお願い致します。

ところで、校舎そのものの工事は終りましたが、本年度は古い体育館と柔・剣道場の解体工事が予定されています。それらの解体後に、前庭・中庭の造園・整備を行い、さらに校地の周囲の境界の整備を経て、はじめて学校全体の改築工事が完成するという運びになる予定ですので、ここ三、四年間は毎年土木工事が続いて行われることでありましょう。

なお、正門東側の鉄筋三階建校舎（二階に「斎藤宗雄記念館」があります）は、改装・改造し、原則として通信制の課程の校舎にあてることにしています。

現在、全日制全校生徒数七八四名ですが、そのうち女生徒は二七八名で、全体の約三五％を占めます。

五十九年三月の卒業生二五六名の内訳は、国公立大学に合格し実際に入学した者八九名（三五％）、私立大学入学者四〇名（一六％）、



▲ 管理棟側より体育館を臨む。

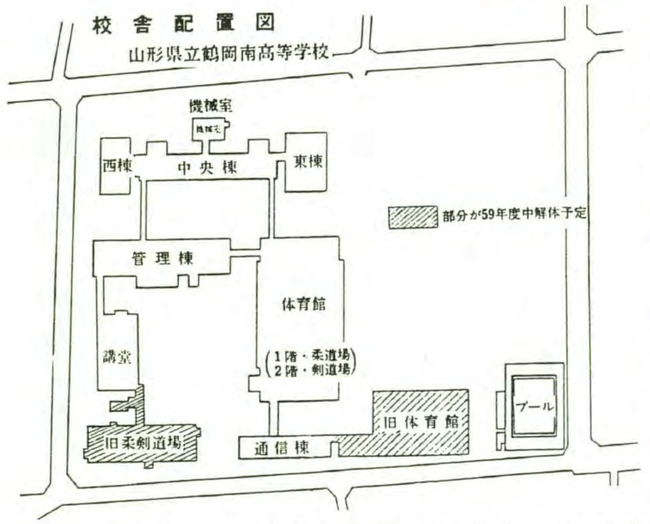
庄内方言集　おらが庄内弁　定価2800円
佐藤俊男著（明治40年、鶴岡市七軒町に生る）
六兵衛館発行（鶴岡市大山町三丁目）
本と文具　ヱビスヤ書店
鶴岡市本町一丁目7－46　TEL 0235－24－1500㈹

庄内の地酒
栄光富士
東京都内での配達は
イズミヤ酒販でどうぞ
電話（03）963・9397
栄光富士

運転免許ならふるさとでの合宿教習で　最短の日数と最低の費用で一気にとれます
普通免許　目標16日間

大型自動車	11日間	大特＋大型	11日間
大型特殊	4日間	大型＋けん引	11日間
けん引自動車	7日間	大型＋大特＋けん引	11日間
大特＋けん引	7日間	〔モーターボート併行教習も可〕	

鶴岡自動車学園
東京案内所　444－4426
〒150 渋谷区恵比寿1－7－4－303



鶴翔同窓会のあれこれ

鶴翔同窓会事務局長
佐藤義三郎

東京鶴翔同窓会より本同窓会の近況についてお報らせ願いたいとのことですので、その模様を申し上げたいと思います。

本校は明治二十一年七月一日の創立に成り、爾来、荘内中学・鶴岡中学・鶴一高・鶴高校等の校名変更を経て、現在の鶴南高にいたりました。その間、卒業生の数は、全日制・定時制・通信制の各課程、及び商業科在籍者数を合せますと、二万八千有余名の会員となり、毎年発行しております同窓会便りは、今年度は一万二千六百通以上の多きに達しました。

このように明治・大正・昭和の各年代にわたります多くの卒業生が、元気一杯に各方面に活躍しておられますことは誠に嬉しく、御同慶の至りに堪えないところであります。

支部の状況を見ますと、東京鶴翔同窓会を筆頭に、仙台・新潟・山形・酒田・立川・羽黒・櫛引・三川というように九支部がございます。更に今秋には札幌に北海道支部が誕生の予定であります。各支部とも殆んど毎年のように支部総会が開かれ、本部との連絡、会員相互の融和をはかっておるのであります。今年度は、櫛引地区総会が去る二月十一日に開催されまして終了、これから東京鶴翔同窓会が六月二十三日に、立川支部が八月中旬に、それぞれ総会開催を決定しております。

一方、各回卒業生の同期会も活発でありまして、第四十二回（昭和九年卒）同期会が六月七日に行われ、鶴岡卒業五〇周年記念会として盛大に挙行されると聞いております。同じく第四十七回（昭和十四年卒）同期会も今秋に、これもまた鶴岡卒業四十五周年記念会として賑やかに行われるそうであります。その他、第三十三回（大正十四年卒）同期会は六月中旬に、第四十九回（昭和十六年卒）同期会は今秋に、第七十一回（昭和三十九年卒）同期会は八月中旬に開催予定と聞いております。

このように各支部、各回卒業生諸君が元気一杯に各分野に活動しておられますことはほんとうに心強く、我が鶴翔同窓会の益々の発展をと望んでおるものであります。

さて本年は本校創立九十六周年の年に当り、昭和六十三年には本校創立百周年の年を迎えようとしております。今回発行の同窓会便りにもお願い致しましたが、百周年記念式典は盛大に執り行いたく、またその記念事業の内容、事柄等は広く皆様の御意見を伺っておるのであります。何卒お気付きの点、御考え等をどしどし本部事務局宛にお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

以上をもって鶴翔同窓会近況御報告を終らせていただきます。

短大・各種学校入学者二五名（一〇%）、就職者二八名（一一%）、予備校など七四名（二九%）となっています。大学進学成績は、数の点では例年より少々多いですが、いわゆる一流大学の合格者が少く、この点での今後の学習・進路指導に一段の工夫・研究が求められるところです。

生徒は資質的には大変優れたものを持っておりますが、少しおとなしすぎ、エンジンのかかるのがおそく、一点、二点を争うガメツサに欠ける（それが長所でもあるのですが）嫌いがあるのが玉に瑕です。

サッカー部が、ご承知のように一月二日に全国高校選手権大会に県代表として出場しました。皆様より盛んなご援助・応援をいただき誠に有難うございました。詳しい内容については別項にゆずりたいと思います。

生徒はそれぞれの部において懸命の練習に励んでいます。しかし、各試合に県内制覇を果すことは、正直のところ仲々容易ではありません。田川地区を勝ち抜いても、県大会では私立高校の壁が堅く、準決勝・決勝で涙を呑む県立高校が多いのが実情です。その意味でも、サッカー部の県優勝は称賛に値するものであると考えます。

野球部については皆様のご期待にそいえず申し訳ありませんが、当面の目標は甲子園進出よりも、むしろ着実に一回戦・二回戦を勝ち抜くことであると考えます。地味ですが、柔道・軟式テニス・卓球・バトミントンなどが、個人戦の上位で活躍しているのを見のがすことはできません。又、女子の運動部が最近少しずつ目立つ活躍を示してきています。

文化愛好グループの多い土地柄を反映し、文化部の活躍も大変活発です。新しい校舎ができたのはよいのですが、これら文化部の練習場・練習時間の確保と校舎管理・保全の問題で、痛し痒しの状況です。吹奏楽の演奏はいつも県下のトップクラスの評価をうけております。

雑然とした羅列になってしまいましたが、母校の現況の一端でもおくみとりいただければ幸いです。

母校への今後一層のご叱正・ご支援をお願いしますと同時に、東京鶴翔同窓会のますますのご繁栄を衷心よりお祈り致します。

田村町店　二丁目大村ビル　電話580-0826
新橋店　松喜ビル一階　電話580-6693
銀座店　服部和光裏　電話564-1902
567-3355-7
日本橋店　中将湯ビル隣　電話275-1697
新橋西店　ニュー新橋ビル2階　電話580-7570

社長　佐藤勇三（昭14・47回）　支店長　三矢弘弥（昭14・47回）

銘酒

加藤嘉八郎酒造株式会社
代表取締役　加藤有造
山形県鶴岡市大山三丁目1番38号　☎0235－33－2008
（都内各デパート、日本名門酒会加盟店でお求め下さい！）

語り継がん、この集いを

東京鶴翔同窓会が設立されてから十四年目になる。十年に一度、めぐりくる年次幹事がその年の総会兼懇親会を企画し、遂行するようになってからは、毎年、立派なテーマのもとに、有意義でユニークな同窓会が開催されてきた。年を追って盛大になりつつあるのはご案内の通りである。今年は「六」の回数の卒業年次が幹事年次に当り、三十六回、四十六回、五十六回、六十六回、及び七十六回生の中から精鋭幹事が選出され、素晴らしい企画を立てつつあるようだ。

庄内の野山に育くまれ、城跡に旧い堀を距てて立つ同じ学び舎に学んだ人々で、現在東京又はその近県に住まいしている者の集いが東京鶴翔同窓会である。この同窓会設立のいきさつも書けという注文であるが、自然発生的に誕生したと言えよう。何故なら、首都圏で生活している同窓生のおおかたの人が、そういったものがあった方がよいと考えていたからである。たまたま昭和四十三年に鶴岡の本部同窓会の会長に、周囲からこぞって就任を要請された平田貢氏（第二十六回生）が、東京に同窓会の支部が結成されることを条件（？）に、会長をひきうけられたということも、きっかけのひとつであった。庄内にいる同窓生が、自分達の子供を東京にいる同窓生などの子女と婚姻の機会を得ようとしても、同窓生の消息がなかなか摑めず、住所もよくわからないので本当に困る、というようなこともあったようである。住居表示が激しく変っていた頃なので、名簿作りにかなり苦労したが、何度かの設立準備会を重ねたあと、昭和四十六年十月八日、鶴岡南高校東京同窓会（本部の平田貢同窓会長のご意向もあって、名称を支部とはしなかった）の設立総会兼懇親会が、千代田区大手町の丸ノ内野村ビル七階の永楽倶楽部の大広間で開催されたのである。初代会長は田倉八郎氏（二十三回生、故人）であった。昭和四十九年に我々の同窓会を鶴翔同窓会と称するようになってからは、当然、東京鶴翔同窓会と言うようになった。

私達の心の奥底には、常に庄内平野や、鶴岡という城下町のたたずまいがある。こよなき地に生を享けたものと思う。風光明媚な庄内の山河、思索的な冬の海、山の幸、海の幸。そしてあふれる人情味。今、我々はこの国の都に住まいしている。胸にしっかりと、庄内の豊かな風土を抱いて。東京鶴翔同窓会の集いが益々盛んになってゆくことを念願する。同窓会というものは、過去をなつかしむためだけのものではあるまい。昨日の自分をそこに見出し、今日の自分を再確認する。何か、こう鬱勃としたものが体内に漲ってきて（私が考えるのに、同窓会というものには、純化された過去のエキスがあり、それに触れるためであろうか？）明日へのエネルギーとなる、といった作用があることを信じる。

語り継がん、この集いを。

（設立当時、走り使いした者の一人）

東京鶴翔同窓会会則

第一章　総　則

第一条　この会は東京鶴翔同窓会といい、事務局を東京都内に置き、山形県立鶴岡南高等学校及びその前身校（以下母校と称する）の卒業者及び修了者並びに関係者の中、東京都及びその近県に在住する者を以て組織する。

第二条　この会は会員相互間の連絡親睦を図り、母校並びに同窓会本部との連絡を密にし、併せて母校の後援に任ずることを目的とする。

第三条　この会の会員は通常会員（母校の卒業者及び修了者）と特別会員（母校の教員、職員及びこの会の趣旨に賛同する者）の二種類とする。

第二章　事　業

第四条　この会はその目的を達成するため、次の事業を行う。

一、毎年原則として一回、親睦会を開催する。

一、会員名簿の刊行頒布

一、必要に応じて会報の刊行頒布

一、その他必要事項

第三章　役員及び顧問

第五条　この会に次の役員を置き、その任期を二ヶ年とする。但し、重任を妨げない。

会長一名、副会長若干名、幹事若干名（内常任幹事若干名）

また、会長の委嘱により顧問若干名を置くことができる。

第六条　役員の任務は左記の通りとする。

会長は会務を総理し、この会を代表する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは之を代理する。

幹事は会務の運営に参画し、常任幹事は会長の定めるところにより、常時会務の運営に分担参画し、重要事項を審議する。

顧問は会長の諮問に応ずるものとし、また随時適当な助言を本会に提言する。

第七条　会長は会員の中から総会において選任する。

副会長及び幹事並びに常任幹事は会長之を委嘱する。

第四章　会　議

第八条　この会を運営するために次の会議を設ける。

一、総会

一、役員会

一、常任幹事会

第九条　定時総会は毎年一回、親睦会と併せて開催し、会務及び前年度の決算、新年度の予算の報告並びに役員の選任委嘱その他重要事項の協議を行う。

役員会並びに常任幹事会は必要に応じて行い、会長が招集する。

第五章　会　計

第十条　この会の経費は会費及び寄附金その他によるものとし、会費は維持会費の一種類とし、その納付は通常会員に限るものとする。

維持会費は、年会費一口千円以上とし、一口以上を予め定められた期日までに納付するものとする。

第十一条　この会の会計は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第六章　その他

第十二条　この会に左記の簿冊を備え付ける。

一、会員名簿

二、役員名簿

三、会計簿

四、会議録

五、その他必要な簿冊

第十三条　この会則の変更は総会の決議によらなければならない。

附　則

第十四条　この会則は昭和四十六年度から施行する。

第十五条　事務局は当分の間左記に置く。

東京都千代田区内神田2－16－9
郵便番号一〇一　荘内銀行東京支店内
電話番号　〇三－二五六－八九一一

竹酒　相馬龍
相馬　龍夫（昭9・42回）
東京都中央区銀座6－12－2
電話 03－573－0501～2　東京温泉前

郷土料理　おばさ

大内キク（酒田市出身）
東京都中央区銀座1－4－10
大内ビル（実業之日本並び）
電話 03－561－6341・6466

荘内と刀剣

薫山

（本間順治 31回）

鶴翔誌上にこの題目で寄稿を希望されたので日本刀に関して私共荘内人がほこりとすべきことをかいつまんで記述する。

酒井家の国宝二口

およそ美術刀剣として国が登録している物件は現在約一八〇万口の多数でその内国宝に指定されているものが一一〇口（内国有一四口）に過ぎないことは数の上でも国宝の権威が知られよう。そしてこれらの国宝及び重要文化財七九四口の大部分が将軍家と大名家の旧蔵であるがその大部分が戦後に四散し、戦後十年を過ぎても旧大名華族家に伝来するものは極めて少数であるがその中に荘内藩主酒井家秘蔵の国宝が二口あることはそれが近年同家から致道博物館に寄附された行為と倶に酒井家を称えたく、荘内人のほこりでもあろう。因みにこの二口の内の一口は平安後期の名工古備前信房作中でも傑出したものであり、いま一口は鎌倉末期の備前長船の上工真光の最高の出来であり、二口倶に名作であることに加えて由緒伝来が立派である。

すなわち信房は徳川家康が豊臣秀吉に大勝した小牧長久手合戦の戦功として徳川家康が酒井忠次に賜わったものであり、真光は織田信長が武田勝頼討伐の長篠合戦の帰途忠次の居城吉田に立寄っててづから贈与したものと云う。おもうに信長も家康も蔵刀中の第一級品を忠次に与えていることが注目され、いわゆる徳川四天王として酒井忠次、榊原康正、井伊直正、本多忠勝が令名がある中でも忠次がかかる名刀中の名刀を拝領していることに因っても彼が重臣の筆頭であったことが付度されよう。

因みに酒井家にはこの二口の太刀以外に昔から相州五郎入道正宗と並び称されている粟田口藤四郎吉光の名物信濃藤四郎の短刀が旧幕時代を通して現在も大切にされており、出来の甲乙よりも地刃の保存のよさに於て同作の多数の名物中にあって屈指であり夙に重要文化財に指定されている。

菅先生と本間光美

さて、幕末以後の荘内藩と酒井家を背負っていた傑物で西郷隆盛と相許す仲であったいわゆる菅先生こと菅実秀氏は非常な愛刀家で蒐集家でもあったが、そのコレクションがいささか玉石混交であったところから世上彼の鑑識を疑う向があるが私は反対であり、なかなかの目利者であったと評価している。

何故ならばそのコレクションの中には後世に国宝に指定された来国俊及び重文となった豊後行平その他数々の名刀があり、就中来国俊のごときはあまりにも健全に保存されているので相当の鑑識家が新刀と誤認する程であるが、菅先生はこれを自慢していたこと、又彼が可愛がっていた子弟に与えているものに限っては高名であるが偽臭のあるものを避けていわゆる末物ながら出来がよいものを選択していること等がその証拠と云えよう。

私の曽祖父で維新当時から明治時代にかけて宗家の当主であった本間光美（いわゆる外衛さん）も並々ならぬ愛刀家であり、旧士族の財的不如意を援助する気持からも生涯を通して彼等から約二千口の刀剣を購入しているがその中にはむろん国宝・重文級のものが皆無であり重美級のものも僅少であったが、剛健質実な荘内藩士の指料にふさわしく末古刀乃至新刀ながらいわゆる青紙クラスのものが多数であった。これらのものの多くがその後の当主光弥及び光正の時代に郷土出身の軍人その他にも贈与され、又光正の時代に朝日新聞と共催した将校軍刀頒布会で多数のものを極めて廉価で販売してその売上金を飛行機献納用として政府に寄附したことは喜ぶべきであったがその残りの多数のものが終戦の砌進駐軍の刀狩の災難にあって没収されたことは惜しまれてならない。

維新から明治にかけて鶴岡在住の旧士族の中に目利者が少くなかったようであるが、なかんづく私の外祖父服部弥惣と丹羽庄右衛門の名が聞えており、前者が古刀、後者が新刀の目利が得意であったようであるが両者から曽祖父光美が入手したものは概して出色であり、まま経眼した丹羽の鞘書のある虎徹のごときもみな正真であった。

鑑刀六十年の回顧

こうした血統をもち環境に育った私は少くも中学生時代から愛刀家であったようであり、大学生時代から頻りに家蔵の刀を愛撫して独学で目利となることを心がけ、やがて叔父の光弥（宗家先々代）父の敬治の奨励があって中央に於ける第一の権威者神津伯先生に同郷の大先輩で、当時すでに刀剣界のお顔役であった三矢宮松先生のお世話で入門して切磋琢磨の結果上達し、昭和三年大学卒業とともに鑑刀のために文部省国宝調査嘱託に採用され戦後文化財保護委員会の美術工芸課長となり鑑刀にも打込み退官後は同委員会の専門委員ひきつづき文化庁の専門委員として国宝・重文に指定する刀剣の諮問に預って今年四月十六日に満八十才を迎えるが此年になれば自ら専門委員を辞退することが慣例となっているので近々愈々五十六年振で在野の鑑定家となる筈である。しかし今後も生涯を鑑刀三昧で終る覚悟である。

回顧すれば鑑刀の面でお国に役立っただけでなく、終戦直後東久邇首相を説得して政府の陳情でGHQの当初の命令であったすべての日本刀を没収することを撤回させ、美術刀剣に限って善良なる国民が所持することを是認させ、さらに私自ら進駐軍の武器取締の首脳である米第八軍憲兵司令官キャドウエル大佐と談判して美術刀剣か否かを鑑別する審査権を日本側が把握したことは今に忘れ難いほこりでありよろこびである。

又戦後からのことであるが役所に於ける鑑刀の助手として手伝ってもらっただけでなく、財団法人日本美術刀剣保存協会の設立とその各面の活動で、親族であり、学生時代の後輩であり神津門下の後学でもあった寒山こと佐藤貫一君から手伝ってもらうことが多大であり彼の功績をいまも時折しみじみと思い出されてならない。おもえば昭和の刀剣界の先達的人物の中に三矢、本間、佐藤の三人が存在したことが荘内のほこりとするに足り、さらに酒井家のご当主忠明さんが熱心な愛刀家であり、刀剣協会の理事として好評があるだけでなく、荘内支部長として模範的によく会員を統率されていることはさすがである。

荘内の幕末の名工

終りに刀剣界の誰もが知る幕末の荘内出身の刀工が二人あることを紹介しよう。その一人は温海出身の清人で江戸に於て当時の第一人者源清麿に学んだが師匠が中年で没した後にその作の負債を代作に因って返済したと伝えているがその作刀の一口に「名人に似たるもの二つあり、酒飲むと銭無きと」自詠の和歌を切っているものがあって名人すなわち師匠清麿をおもう気持がよく表れてほほえみを禁じ得ない。いま一人は復古刀の提唱者として名高い水心子正秀の弟子である池田一秀で飽海郡観音寺の出身で鶴岡で作刀しているが技倆は清人とほぼ伯仲し覇気に於て清人がやや優るが生一本の一秀の真面目さも好もしい。

（前刀剣博物館館長）

59年度企画展

6/13～7/2 東北の画人
8/1～8/20 鶴岡ゆかりの文化財展 －市制60周年記念協賛－
9/1～9/24 農耕図に見る生活と仕事
9/26～10/10 白 隠－書と禅画－
10/25～11/23 日本近代洋画の先駆者 浅井 忠展

〈出 版〉
「臥牛・菅実秀」加藤省一郎著
1部1800円・送料250円

(財)致道博物館
鶴岡市家中新町10－18
☎ 0235－22－1199
振替口座 山形9－217

役者のつぶやき「おしん」のことなど

大久保正信（47回）

東京鶴翔同窓会々報に原稿を書けとのお手紙を戴いたのは三月明治座公演〃おしん〃の初日の頃であった。降ってわいたような話しに私は有難いと思うと共に、心に深い戸惑いを感じた。テレビでも、明治座の舞台でも、上映中のアニメーションでも山小屋の松造という爺さん役を演じさせて貰い、しかも方言指導という大変な役まで全部やらせていただいたのである。鶴翔同窓会の諸先輩、後輩の諸兄諸姉に、「あの庄内弁は違う」と、大変なお叱りを受けそうなことも心の重荷になっていたからである。

「おしん」の庄内弁

私は言語学者でもなければ、特別に方言を研究しているものでもない。ただ誰よりも今日迄言い継がれ、語り継がれて故里の土と、生活の中に生き続けている「庄内弁」をひたぶるに愛する一俳優に過ぎない。

私は庄内地方の言葉を使うことによって〃おしん〃というドラマがより視聴者の心に温味と、安らぎと、根っこのある美しい韻律が残ってくれればと願っただけのことである。だから私は決して純粋の「庄内弁」を要求しなかった。〃おしん〃というドラマのための「庄内弁」であればよかったのである。これこそがほんとうのリアリズムなのだと私は思っている。故郷を離れて四十年、私の躯が覚えている珠玉のような「庄内弁」の韻の美しい響きを必死に掘りおこした私は、ドラマを通して伝えたかったのである。

結果として不満と、悔恨はいっぱい残った。だが、沢山の人々から山形の言葉ってホントウに美しい言葉だと、讃辞をいただいたのである。

〃おしん〃の放送の終った日の朝日新聞夕刊で素粒子は言っている。「終ってやれやれ、肩のこった国定ホームドラマ。おじんおばんの老涙を絞った、おしん」と。そういう皮肉った洒落れた見方もあるだろう。だが現在、視聴者に媚び迎合する作品の多い中で、〃おしん〃は作者、制作者達のしたたかなメッセージ、主張を持った作品だったと私は思う。だが、製作者達の思惑を離れて勝手に独り歩きしていったのだとは言えないだろうか。マスコミの怪物的な凄さ、怖さを私は感じないわけにはいかないのである。私ですら何十年も会っていない友人から電話がきたり、街の中で見知らぬ人に話しかけられたりした。それがたいがい賞め言葉なので、「そうですか」とも、「いいえ」とも言えない私はただテレ笑いにごまかし無口になるばかり。

▲ 大井沢ロケ。左・松造（大久保正信）と右・俊作（中村雅俊）

役者のむなしさ

だがきまってそんなとき、役者のはかなさ、人の命のむなしさといった思いがポッカリと大きな穴をあけて私に迫ってくるのである。何故なのだろうか。それはどうしようもない苦渋にみちた真実なのである。黒々とした闇の中にひろがる無気味さの中に、私自身の心の深層の裂け目とでもいうか、いのちの燃焼の終末の日の炎をみつけたような思いになるのである。それは役者の宿命とでもいうべきものだろうか。

学徒出陣、野戦の小隊長でもあった私が昭和二十一年五月、南支那から復員した時は二十四才の若さであった。多数の学友達が再び生きては還ってこなかった。戦死した彼等に代って〃人間らしく生きてみたい〃と私は考えた。死んだ者がモノを言えない以上、生き残った人間がナニをなすべきか、の「きけわだつみの声」の問いかけが私を役者の途に生きるようにさせたともいえる。二人の息子を二百三高地で戦死させたと設定されている山小屋の松造爺を演じている間、三十八年前のこの問いかけが斬新なものとして私の躯中を駆け巡っていた。

雑草の花の美

役者――それは風狂の途であり、他人を蹴落すこともなく、ひたすらに自分の生命を完全燃焼させることのみを念じ、ひとり静かに歩み、不条理を憎む心忘れず、時が来れば黙って消えてゆけばいいことだと私は信じている。

私の役者人生も終幕を迎え始めたというべきであろう。いろいろの人と出逢い、いろいろの人と訣れてきた。人生とは訣れるためにある一瞬の歴史ともいえる。悲しいとか、寂莫とかではない、あまりにも峻厳な事実である。ただそれだけのことのようだ。ならば何も言うことはない、その日、その日を生きている自分を厳しくみつめ、風化させることなく器量いっぱい生きてゆくだけのことである。雑草の花の美しさを、その自然さを、そしてそのポテンシャルパワーを私はこよなく愛するのである。

（俳優）

「鶴南を甲子園に出させよう会」誕生！

．鶴南野球部は去る三月二十五日から、茨城県新治郡千代田村自然休養村で三十日まで、合宿練習を行い、石岡商業、土浦三高等と練習試合をやって、三十一日に帰郷した。

在京の同部後援会は、掲記の様な標語を掲げて再出発する事になり、三月三十一日には上野の北京飯店で、選手監督一同の慰労激励の会を催し、後援会からも二十数名出席して、総勢四十数名の懇談会となり、今後の活躍を期する事となった。

代表幹事は平田正（昭20卒）、幹事には相馬龍夫（昭9）、早坂勉（昭28）、佐藤隆夫（昭41）、顧問梅津正吉（大15）。

阿宗建設株式会社
〒101 東京都千代田区外神田6－5－4 ☎ 03(834)2821(代表)

協和住宅株式会社
〒167 東京都杉並区井草5丁目11番4号 ☎ 03(396)8401(代表)

取締役社長 阿宗保治郎 (43回)

HOTEL 山王プラザ
代表取締役 真島鷹蔵 (52回)
鶴岡市山王町6－8 TEL (0235)22-6501(代)

東京の中の庄内

坂本守正（45回）

東京をみる目

東京かその周辺に永年住んでいても、東京とは何か、江戸とは何であったかをわかろうともしないうちに、仕事に追われて瞬く間に晩年を迎えてしまうというのが、われわれ庄内出身〝東京一世〟の平均像ではなかろうか。

江戸時代も、人口の半分は地方諸藩士や関西大店の出店奉公人から成り、いわゆる〝江戸ッ子〟ではなかったようだ。今も昔も東京は、地方出身者の巨大な寄合世帯といえる。

サラリーマン二・三世にとっては、故郷はもう庄内ではなく東京ということになる。両親は子や孫に自分の望郷の懐いを語り聞かせても、若い世代はさして共感しないかもしれない。まして郷土の歴史を顧みることなしに過ぎれば、知的興味を子や孫に起こさせる話題にも事欠くことになる。自らのアイデンティティを確認するには、どうしても由って来たるところ——歴史への省察が欠かせないこと、申すまでもないだろう。

オトシのせいでここ数年少しずつ史書・史料を読むうち、だんだん自分じしんの足が地についてくるような実感を覚えつつある。そして今になって、国内海外諸都市に転勤駐在していた時代は、いわばデラシネ（根無し草）の漂泊に過ぎなかったと気づかされもする。もっと早く自分の足許に関心をもつべきだったという反省とともに。

二、三月に岩波市民セミナー、西山松之助「江戸学とは何か」を聴講し、江戸東京の地勢、大江戸の成り立ち、江戸町の実生活について啓蒙されていらい、都内を歩けば全く新しい視角から東京を見直している自分じしんを発見し、ようやくオレも東京人になりかかったかナ、と感じ初めている。

庄内藩本邸が経団連に

そこへ、致道博物館東京友の会が、今年の九月から毎年、「東京の中の庄内」見学のバス・ツアーをやろうというプランを発表した。準備委員の一人を仰せつかり、欣然お引受けしてあれこれ案を考え始めたところである。

宮城のあたりは中世の墓場で、日比谷のへんまでは海だった。庄内藩神田橋本邸が今は経団連、日経本社ビルと化した。酒井忠篤・忠実の母君の実家田安徳川家が建てた燈台（九段坂に現存）の灯は、そのころ品川の舟の好目標であった。それほど江戸の町は暗かった。戊辰役第二番大隊長、〝鬼玄蕃〟こと酒井吉之丞了恒の墓は、庄内ではなく谷中にある。清河八郎の三度目の塾は、千葉周作道場・東條一堂塾と同じく神田お玉ヶ池にあった。その跡は今どうなっているか。暗殺された場所、麻布一の橋は？　鳥羽伏見戦争の引金を引いたとされる、庄内藩を主力とする幕軍の三田薩摩屋敷の砲撃、その現場は？

次代への伝承を

百五十年むかしの人になって、江戸の上に刻みこまれたわれらが祖先の哀歓の痕を弔うことは、取りも直さず次の世代にわれわれの足跡を記憶させることにつながるであろう。それがリクツでなしに、歴史や文化の具体的な伝承というものではあるまいか。

ともかく、一回でとても巡りきれるものではない。博物館としては少くも三年はつづけたい意向という。鶴翔・如松双方の有志が年に一度〝お江戸見物〟のあと、一献清酌を交わして散会する——ワルクないですな。

（月刊「冬青」編集発行・冬青社代表）

「川上記」—鶴岡町大庄屋 河上家文書—について

大川勝三郎（43回）

郷土史に関する新発見などのテーマで、何か寄稿して欲しいとの御依頼を受けたが、日頃不勉強故、新発見などは思いもよらず、鶴岡市史編纂会から間もなく上梓される「川上記」について、その一端を御紹介して責任を果させていただきたいと思う。

大庄屋の河上、宇治

庄内藩時代、城下町鶴岡において、町方の総肝煎役としての大庄屋を、代々勤めてきたのは河（川）上と宇治の両家であった。河上家は代々四郎右衛門と称し、宇治家は代々勘助を名乗ってきた。この両家は最上氏時代からの町方の名門で、最上氏改易の際、鶴ヶ岡城の接収に当って、城内の兵具・道具類の引渡目録に、野坂（徳右エ門）・芳賀（二郎右エ門）・中村（弥兵エ）の三者と共に、立会人として加判している。

鶴岡町の大庄屋は御徒（おかち）同格の身分で、町奉行の配下に属し、藩当局から出される様々のお触（ふれ）などを町方に伝達したり（上意下達）、町方から藩への願い事などを取継ぐ（下意上達）など、町政全般にかかわる極めて重要な役職であった。大庄屋の支配下にある町人町は、北から順に荒町・八間町・下肴町・五日町・三日町・十日町・一日市町・南町・七日町・上肴町・新町（以上大体商人町）、檜物町・銀町・鍛冶町（以上職人町）の十四町であった。

「川上記」の由来

やや前置が長くなったが、本題の「川上記」なるものは、旧藩時代を通じて、宇治家と共に、歴代町大庄屋を勤めてきた河上四郎右衛門家の御用帳風の日記である。この「川上記」の原本は伝わらないが、幸いにも「川上記」写本四冊が酒田市光丘文庫に現存するので、この写本によって、原「川上記」のほぼ全容を推察することが可能である。その経緯を考えると、幕末期（嘉永・安政頃）に庄内藩で、藩史編纂の事業が企図された時、その史料の一つとして「川上記」が利用されることになり、史局においてその筆写が行われた。その後、内外の情勢が急迫し、修史事業が中断のやむなきに至ったが、「川上記」の写本は、史局の元締であった松平武右衛門（家老）の手もとに留まり、その後故あって酒田本間家の有に帰したものと考えられる。現に「川上記」四冊のいずれにも「松平武右衛門図書」の押印があり、その間の事情を明かに物語っているものと思われる。

江戸前・中期の記録

「川上記」の記事の年代は、大体寛文期（一六六〇年代）から宝暦期（一七六〇年代）に至る、江戸時代の前・中期の約百年間に亘るもので、その間、河上家が町大庄屋として取扱ってきた、鶴岡の町政や町人生活万般の事項が、ほぼ編年体的に記録されている。

さて「川上記」の筆者についてであるが、奥書がないので誰々と断定することは出来ない。ただ年代や記事内容からみて、河上家二代目から五、六代目頃までの歴代の当主四郎右衛門が、書き継いで来たものと見るほかはあるまい。因（ちな）みに六代目四郎右衛門和好は俳号を兆而（ちょうじ）と云い、その子七代目和宣（俳号文化）と共に、鶴岡における美濃派俳諧の宗匠として、庄内俳壇史にその名を留めている。

旧藩時代、河上家の屋敷は三日町通り丁の四つ辻の北東側にあった。しかし明治期には鶴岡を去られ、現在子孫の方は武蔵野市に在住されていると聞く。

市史編纂会では、河上家と並んで歴代町大庄屋を勤めてきた、宇治家の文書を上下二巻に分け、昨年『荘内史料集11・12』として刊行した。この「川上記」も亦、上下二巻に分けて上梓することになり、多分上巻は四月中に、下巻も六月頃には発刊の運びとなる予定である。

右の宇治・河上両大庄屋文書は、藩政期における町方史料の双璧ともいうべく、高く評価されているものである。郷土史に関心をもたれる方々に、あえて一読をお勧めする次第である。

（郷土資料館勤務）

がまんをもらう話

門脇厚司（66回）

池袋児童の村小学校

私は、いま、池袋児童の村小学校の卒業生やかつてそこで勉強した人たちと直接会って話を聞くことにしている。小学校のころ、伸びのびと育てられた子供たちは、その後どんな生き方をすることになったのかを知りたいためであり、教育改革論議が、肝心の子供たち抜きで無責任になされている昨今、そうすることで私なりに責任のもてる改革の方向を提示したいと思うからである。

池袋児童の村小学校とは、大正大震災の翌年（大正十三年）四月に、日本のペスタロッチといわれる野口援太郎が自らの私邸を校舎に開校し、自由でのびのびとした教育を行った私立の小学校である。時局が厳しくなるにつれ、こうした教育はやりにくくなり、昭和十一年七月に閉校となったのだが、そんな事情からこれまで〝幻の小学校〟としてながくその実相が知られないままで今日にいたっている。この学校については、近々、かなり大きな書物にして世に問うつもりだが、開校から閉校まで、そこで訓導・主事として直接教育に当った人に野村芳兵衛なる人物がいる。

野村氏は今年八十八歳、この三月新宿・中村屋で米寿のお祝いをやったばかりなのだが、いまも女子短大で教鞭をとっているほど元気である。私は、これまでも何度か、児童の村小学校の教育のことをうかがいに岐阜に訪ねているが、四月末、四度目の訪問インタビューをしてきた。

〝がまんをもらう〟

今度もまた、貴重な話をいくつかうかがうことができたが、そのなかで、興味深かったのが〝がまんをもらう〟話である。

がまんをもらうとは、野村芳兵衛氏がつくった言葉だというが、その言葉を聞いたとき、私には氏の教育についての考え方がそこにすべて語られているように感じられた。

野村氏は、浄土真宗の信徒で、親鸞や両親の教えをきっちり受けとめている人間である。

人間が作る世の中を生きていくのは何とも辛いことだが、またどんなに清く生きようとしても、所詮地獄に落ちるのがさだめとわかってはいても、それでも、自棄にならず、自分が出会った人たちとは一緒に生きていかなければならないのだと心にきめている人である。善人も悪人もいわゆる〝同行者〟である、という考えを自分の血肉にしている人物である。こんな人物がつくった言葉が〝がまんをもらう〟なのである。どんなことを意味しているかはほぼ推測がつこうかと思う。

駄々をこねむずかる子がいると、「太郎ちゃん、外にがまんもらいにいこうか」という。小さい子をいじめている子がいると、「次郎くんはまだがまんをもらってないのかなあ」といったりもする。そう子供にいうだけでなく、野村氏は、子供と一緒になってがまんをもらう。子供と向い合うのではなく、同じ方向に向って歩く姿勢をとる。いやなことは、ともに気分の転換をはかってやりすごす。苦しいことはわかちあう。楽しいことは共有する。そんなことをまるごとひっくるめて、野村氏は〝がまんをもらう〟と表現する。生きにくくとも生きていかねばならないと考える人の実感を口にすると、恐らく、そうした音のつながりになるのだろうと思わせる言葉である。

生きにくい社会を迎えて

日本の社会はいま、いよいよビョーキ的症状をつよくしてきている。生きにくさは日増しにつよくなるばかりである。それでも、自棄にならずに生きていくには相当の〝思想〟が必要になる。〝がまんをもらう〟という前向きな姿勢をいまわれわれは自分のものとしていかねばならないのだ、と考えることしきりである。

ところで、池袋児童の村小学校の開校に当ってそれに参加しようとした人物が荘内にもいた。その名は工藤恒治。いずれ、この人物についても調べるつもりでいるが、遺族や親族の消息を知っている人の協力がえられれば幸いである。

（筑波大学助教授）

鶴南サッカー部奮戦記

南校サッカー部部長

鶴南サッカー部の全国高校サッカー選手権大会初出場に対し、東京鶴翔同窓会の皆様方より多大な御芳志と熱烈な応援を賜わり誠にありがとうございました。銀行口座に直接振り込んでいただいた方や転居先不明で礼状発送できないでしまった方々を初め、同窓会の皆々様に、不手際をおわびすると同時に、紙面をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

今春、卒業生は全国大会出場の自信と鶴南OBの自覚を胸に、筑波大・中央大を初めとする大学及び社会に巣立って行きました。彼等の胸には全国大会の華やかな思い出と同時に皆様方の暖かな御応援が生涯消える事なく刻まれている事と存じます。

試合終了のホイッスルが無情にも鳴り響いた。スコアは0対4。対戦相手「多々良学園」の校歌を聞く彼等の胸の内を一体何が去来していただろうか？流れる涙を拭おうともせずグランドに立ちつくしていた。

思えば夢の様に過ぎ去った半年間ではあったが、級友達が受験勉強に拍車をかけている姿を横目で見ながら、暗くなるまで練習を続け、寒さに震えながら校舎の一隅で自主補習を行なった。遠征の車内では参考書を開き、宿舎では問題のかけ合いをする。そんな張りつめた生活の中で、「実力はあるが肝心な所で勝てない」と言われた精神力が鍛えられたに違いない。

事実上の県代表決定戦と言われた日大山形戦。「今まで何の為にがんばってきたんだ。こんな所で負けていられるか」を合言葉に、日大山形の猛攻をしのいで3対0の決勝。

「全国で勝つ」事を目標に国士館大学の胸を借りた強化合宿。東京都ベスト4の正則学園を3対0で下し順調な仕上がりに見えたがやはり全国の壁は厚かった。今後さらに練習を重ね、一刻も早く「全国で勝つ」チームになりたいと思う。

再度の東京勤務

荘内銀行東京支店長
加藤隆（54回）

この三月、荘内銀行東京支店長を命ぜられ赴任いたしました。前に四四年から五〇年まで東京支店に支店長代理、次長で六年間勤務していましたので今回は二度目の東京勤務です。東京鶴翔同窓会発足の頃中山喬次長の下で事務局をやらせて頂き、今は亡き田倉八郎会長、西川速水、服部泰雄諸先輩からお教へ戴いたことをなつかしく想い出されます。また今度も事務局を担当させて頂き、梅津正吉会長のもと、東京鶴翔同窓会の発展の為に微力を尽したいと存じておりますので、何卒よろしくご指導の程お願い申しあげます。

国際観光
グランド エル・サン
〒997 山形県鶴岡市苗津
☎0235-24-4633
鶴岡産業会館
和風れすとらん えるさん
〒997 山形県鶴岡市馬場町
（鶴岡産業会館内）
☎0235-22-1400

代表取締役　早坂剛（65回）

第13回 東京鶴翔同窓会記

第十三回東京鶴翔同窓会は昨年六月五日(日)、東京九段ホテル・グランドパレスのダイヤモンド・ホールにおいて午前十一時半から二時半まで、東京如松会(旧鶴岡高女・鶴岡北高校)との五年ぶりの合同同窓会として開催された。

母校校長、鶴岡本部および東京同窓会会長、鶴岡市助役、東京亀城会会長等来賓あいさつのあと、〃世代間の交流を深めよう〃という昨年のテーマにそう具体的事業の一つ、母校在校生のそれぞれ予選を通った絵画(庄内の風景、風物等、会場入口に展示)各十点について、金・銀・佳作賞の表彰を行い、ついで両会最年少女子会員による初孫・栄光富士の鏡割りにつづく乾杯をもって、和やかに開宴。

開演と同時に、鶴岡市と姉妹都市を結んでいる江戸川区の「江戸小松流太鼓保存会」の皆さんによる友情出演があり、興趣はいちだんと盛りあがる。

しかも会衆じつに六百名近く、さしもの大ホールも定員超過の嬉しい悲鳴をあげる、今までかつてない盛況であった。

新しい試みとして今回は、一つの卓をなるべく同じ小学校・新制中学校出身の男女両会員が肩を接して囲むように席割りをしたので小・中学同窓会の趣もあり、何十年ぶりかであの人、この方に再会する感激の場面もみられ、宴たけなわのころは、席をこえ世代をこえて〃交流を深め〃合い、豊かな懇親の実をあげることができたようだ。

東京の山形県人会でさえ集まるのはせいぜい五百人、それが庄内のしかも鶴岡という一つの町だけで、六百人になんなんとする男女が一堂に会して同窓会をもつなどというのは、他にあまりない例ではなかろうか。

なぜだろう。

やはり庄内の美わしい山河、母なる大地を愛しなつかしみ、そこに刻みこまれた歴史と伝統を誇りとする真情が、他のどこよりも強いからではないかと思われる。庄内に生れ育ち、育てられて今日あることの幸福感を出席者全員がしみじみとわかち合い、充足感にみたされながら「五年後の第三回合同同窓会でまたお逢いしましょう」とのあいさつをもって、なごやかに散会した。

(前回幹事・坂本春吉氏＝45回＝記)

(第13回　東京鶴翔会出席者)

来賓　酒井忠明　佐藤義三郎　門野文雄　石原重雄　小松佳雄　佐藤朋子　佐藤善一　五十嵐文夫　佐藤公志　鎧谷誠一　佐藤昌祐　土田喜彦　阿部鎮一　柴田貢　瀬川扶実子

26回　村山孝治
31　佐藤壮介
32　柄澤五郎　斎藤三郎
33　中川(本間)重男　遠藤匡輔
34　斎藤求　大滝信吉　深瀬宏　梅津正吉
35　堀朝之輔　清水清　船山孝輔　広木護郎
36　高山巌昭　海老名五郎
37　深谷巧　中村一郎　真嶋恭雄
38　大井正　石原知津　成沢寿　天池健彦　中嶋光矢　小関元常
39　水口武三郎　土方達大　渡会正三　伊藤貞治　板垣(菅原)正作
40　斎藤茂雄　船戸春夫
42　高橋(斎藤)敬道　田中浩　秋山太一郎　伊藤啓五郎
43　富樫常夫　三井広弥　阿宗保治郎
44　中村(新宮)忠次
45　竹内(土田)淑郎　寺岡義春　茨木廣　坂本春吉　猪股亀三郎　林信雄　平野成一　伊藤良和
46　菅原茂　加藤寛二　佐藤一郎
47　佐藤安男　三矢弘弥　大久保正信　佐藤(池田)勇三
48　山科勝男　後藤俊夫　宮村巌
49　五十嵐晋　江部悌三
51　久米井安雄　中村信雄　佐藤達夫　渡辺整　鷲田幸雄　高木有
52　野沢寿二　土岐良次　上野識　菅原隆輔
53　今野巌　日向豊雄　富樫泰教　山本昌美　大島謙一　菱谷岩雄　五十嵐藤一　叶野七郎　旅河伸介　平田正
54　佐藤(柳瀬)英二　松村正　佐藤良三　中里欣一　田中(斎藤)更士　佐藤正英　尾形俊作
55　松田鍵吾　植村稔　五十嵐和夫　和田晶　中野薫　植木清哉　伊関孝　半田一郎　菊池安行
57　菅原良雄　鈴木雄三
58　佐藤誠　菅原純一　佐藤正和　地主幸右　柳田(永澤)輝子　本間章介
59　加藤一夫　松本直明
60　石栗八郎　白幡義博　茂木勲　菊地俊哉　加藤憲作　伊関(大友)伸子　笹原徹
61　佐藤正吾　佐藤啓輔　西海隼雄
62　三浦五八　上林正寿　芳賀二三夫　稲泉一彦　小林寿太郎　高橋徹　加藤次郎　河野通暢　奥田文夫　佐藤俊祐　阿部芳勝
63　松井達斗　本間隆　水原邦保　梅木勇　斎藤彰　外池(渡辺)連子　榎本(佐藤)堯　石塚知久美　中村君子　桜井(大滝)文子　郷守幸三　小野寺洋　平田宏　御橋廣真　岡田恒祐　菊地正士　三浦孝英　宇佐美勝夫　久保誠　鎌田(佐藤)喜子
64　榎本克弘　兼子肇　三浦計治　前田節　斎藤憲　渡部賢一　菅原忠　今野清　森弘　工藤国捷　宇田(鹿野)智恵子　小花吉彦　鳥海元晴
65　板倉(山口)利　斎藤一志郎　大沼宏　菅原貞良　高橋功　阿部文治　佐藤隆　大久保晋一　加藤有紘　竹野善一郎　墨井富士男　平田惇　相田勝弘　三浦信也　高橋詢　斎藤正幸　小松原隆治
66　野口紀雄　小野寺裕　後平辰美　佐藤捷実　三矢正士　山口義晴　本間省二
67　渋谷昶明　富樫秀　大江秀治　加賀山忠男
68　渡部洋
69　斎藤征士
70　寒河江孝允　後藤広喜　宇佐美(斎藤)登喜子　小林(大川)勉　地主忠夫　渡辺勝
76　伊藤(漆山)美行
59　石井忍　47　菱谷清　57　重山英明　60　水原繁美　61　山中晃吉　62　成田長弥　64　三浦計治　?　長谷川佳則　?　渡辺一正　65　松井清次　65　宮崎正　62　五十嵐隆二　68　相馬章　44　鈴木弘二　48　渡会春雄　45　竹内淑郎　46　石川義吉　62　池下豊子　58　高橋吉郎　46　佐藤八郎　48　田中武次郎　61　相馬和彦　31　中島光史　58　加藤郁　47　奥津秀一　66　水口武二

公認会計士・税理士・不動産鑑定士
毛呂正臣　(51回)
事務所　東京都港区新橋6－5－1
DIK新橋ビル203号　電話：438－1818
太陽監査法人　東京都港区西久保桜川町27
第12森ビル8階　電話：503－0935

お米のベストセラー・ふる里の味……

農協・庄内経済連

祝　東京鶴翔同窓会

溶融亜鉛メッキ用マスキング剤……サントモマスキング600
耐熱・耐蝕塗料サントモ
耐熱温度950℃耐酸・耐アルカリ・耐スチームのすべての条件を満足致します。
総発売元　三井物産化工機販売株式會社
製造元　DAIKO 大鵬塗料株式會社
販売代理店　MSK 都産業株式会社
東京都港区東新橋2丁目5番11　メトロ沖山ビル3F
電話　03(437)5328・(431)1725

かけがえのない水
英知と技術でリサイクル
東北環境開発株式会社
取締役社長　植木清之
取締役専務　木村有為
常務取締役　泉川智子
本社　鶴岡市大字下清水字打越2－1　☎(0235)24－3110(代)

マンション「ベルハイム用賀」「ベルハイム自由ヶ丘」分譲中
心のこもった住まいづくり
三和ハウス株式会社
代表取締役　佐藤　隆(65回)
本店　練馬区関町北3－37－2　☎　928－3301(代)
販売事務所　ベルハイム用賀　☎708－3580　ベルハイム自由ヶ丘　☎725－3885

――心の故郷――
月山　羽黒山　湯殿山
出羽三山神社
〒997-02 山形県羽黒町手向7
電話　社務所　0235－62－2355
羽黒山斎館　0235－62－2357
湯殿山参籠所　0235－54－6131

公共下水道　処理諸装置
株式会社
興和製作所
取締役社長　植木清之
本社・工場　鶴岡市本町三丁目6－33　TEL 0235(22)6363

有限会社　菅原シャーリング
代表取締役　菅原　忠
(64回卒)
〒333 埼玉県川口市江戸3－13－11
電話：0482－84－5163

山形食文化の店　瀬川　2F　和室　40名様迄
生演奏、歌える店　エイテイエイト　B1F　カウンターボックス　50名様迄
クラス会・二次会にご利用下さい
瀬川
東京都港区赤坂4丁目2番5号
ヤブタビル　(一ツ木通り)
電話(03)584－1388

昭和58年度東京鶴翔同窓会収支決算書

(昭和58年4月1日～昭和59年3月31日)

1　一般会計　(単位：円)

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
前期より繰越	183,798		
総会費	1,122,000	総会費	1,751,535
年会費	474,340	事務費	608,958
広告料	1,758,400	(印刷費)	(423,558)
		(通信費)	(185,400)
雑収入	98,782	会議費	329,785
(祝金)	(90,000)	その他	86,188
(預金利息)	(8,782)	特別会計積立金	700,000
		次期繰越金	160,854
合計	3,637,320	合計	3,637,320

2　特別会計積立金(名簿作成等積立金)

57年度積立	300,000
利息	15,247
58年度積立	700,000
合計	1,015,247

昭和59年4月

監査の結果上記の通り間違いありません。

会計監査　伊藤貞治　㊞

祝 東京鶴翔同窓会

本店　鶴岡市本町１丁目９－７
電話　(0235)22－5211

荘内銀行東京支店

支店長　**加藤　隆**

〒101 東京都千代田区内神田２－16－９
電話　03(256)－8911

産婦人科 **丸谷医院**

丸谷八郎（35回）
丸谷紘一（65回）

鶴岡市馬場町８－23　電話 0235－22－0258(代)

荘内日報

本社　〒977 山形県鶴岡市馬場町８－29
電話　0235（22）1480(代)

三浦産婦人科医院

三浦光彦
三浦宏平（66回）

鶴岡市朝陽町４－10　電話　0235(22)0228

庭山眼科医院

庭山直子

〒950 新潟市神道寺１丁目９番21号
TEL（0252）41－3973

車輌建機電装品全般―卸・小売り及び修理

有限会社 **児玉交通電機**

代表取締役　児玉光弥（66回）

山形県鶴岡市中央産業通り３丁目
（大字布目字東通り８の３）
電話　鶴岡（0235）23－5038(代)

ありがとうと言われるメガネ作りをめざしています

全日本眼鏡技術者協会々員

メガネのヤスノ

安野宏一（66回卒）

〒997 鶴岡市本町一丁目5-30　☎0235－24－1795

"きれいな街づくりに奉仕する"

有限会社 **大滝商店**

代表取締役　大滝浩司（66回卒）

鶴岡市大字大淀川字洞合68番
TEL鶴岡<0235>(22)1889（代表）
自宅　鶴岡市陽光町15番14号
〒997　TEL 鶴岡<0235>(24) 0978

田中写真館

鶴岡市湯乃浜
Tel. 0235（75）2421
田中藤市（66回卒）

静かにくつろぐ湯の里‥‥湯田川温泉

たみや旅館

〒997-07　鶴岡市大字湯田川乙15　☎（0235）35－3111(代)

株式会社 **たみや旅館**
代表取締役　今野民弥（39回）
代表取締役　今野悦郎（66回）
取締役　今野睦子（71回）

marketing communication creators

COMS 株式会社コムズ CO.,LTD.

本社・工房　〒104 東京都中央区京橋3-12-1 エコー京橋ビル3F・6F　PHONE 562-5201
STUDIO　〒104 東京都中央区京橋3-11-2 ワタナベビル3F　PHONE 564-5260
TELEX 33222 COMS FACSIMILE 562-5208

祝 東京鶴翔同窓会

川崎にうまい店あり。
庄内おばこと言う。

郷土料理 **庄内おばこ**
送迎マイクロバス有り　**別館《出羽》**
鶴岡大山出身　佐藤勝義
大小宴会 川崎市高津区久地486　国道246
電話 044－833－7309(代)　バス停前

各種電気設備・CATV・冷暖房・給排水工事の設計施工

新生電業株式会社

常勤監査役　佐藤亮哉（46回）

〒105 東京都港区芝公園２－４－１　秀和芝パークビルA館
電話　03（432）6311
（支店）北海道・東北・新潟・中部・大阪・広島・九州

ビニールパイプ（給排水）製造販売
ビニール板、プラスチック製品の販売

大水産業株式会社

代表取締役　佐藤一郎（46回）

〒336 浦和市大間木1733　TEL 0488－73－8121

日本ホフマン株式会社

東京都千代田区一番町
☎(03)262－1528(代)
代表取締役　小野寺裕（66回卒）

工業用機械システム製造販売及エンジニアリング
各種濾過機及分離システム（26種250モデル）
ホフマン型遠心ブロワー及関連システム(20種1000モデル)他

カクショウスチール株式会社

代表取締役　水口武二（66回卒）

東京事務所　〒162　東京都新宿区新小川町５番15号（丸美ビル３F）
電話（03）235－1701(代)
FAX（03）235－1277
本社　〒194　東京都町田市つくし野４丁目21番地41
電話（0427）96－2550

宮崎富哉法律事務所

弁護士　宮崎富哉（48回）

〒102 東京都千代田区四番町四番地九
東越伯鷹ビル６階
電話（03）265－4454

高島産業株式会社 庄内工場

専務取締役　後藤俊夫（48回）

〒997-03　山形県東田川郡櫛引町大字山添字庄南39　庄内南工業団地
TEL 0235557－4212・4213
〒112 本社　東京都文京区大塚５－22－10
TEL 03－943－2751（代）

石鹸・化粧品・日用品の総合問屋

㈠三河屋商店

●本店　鶴岡市本町３－12－20
☎ 0235（22）1900(代)
●東京連絡所　豊島区南大塚１－26－26
☎ 03（944）6986　鷲田（66回）

高橋鐵商有限会社

代表取締役　高橋清（65回卒）

栃木県宇都宮市野高谷町240－70
〒321-32　☎ 0286（67）5021

手打そばと炭焼き

大松屋

〒104 中央区銀座5-4-18　銀座1・Nビル2F(tel)571-7053
そば本店　山形県鶴岡市水沢／菓子本店　山形県鶴岡市日吉町

"本は心の糧"
幅広い読書をおすすめします。

BOOK'S SHISEIDO **志誠堂**

本店・蕨市中央　TEL 0484－32－2138(代)
南浦和店・南浦和東口　TEL 0488－87－7711(代)
川口店・川口市栄町　TEL 0482－53－2255(代)
植村稔（55回）　TEL 0484－32－3279